

○ 中間評価の結果について

- ・「現段階では、当初の計画通り研究開発のねらいを十分達成している」（9校）

〈学校名〉

茗溪学園中学校高等学校	埼玉県立川越高等学校
東京都立小石川中等教育学校	石川県立金沢泉丘高等学校
長野県屋代高等学校	名古屋大学教育学部附属中・高等学校
滋賀県立膳所高等学校	ノートルダム清心学園清心女子高等学校
佐賀県立致遠館高等学校・佐賀県立致遠館中学校	

- ・「現段階では、当初の計画通り研究開発のねらいをおおむね達成している」（29校）

〈学校名〉

岩手県立盛岡第三高等学校	福島県立磐城高等学校
茨城県立水戸第二高等学校	作新学院高等学校
埼玉県立川越女子高等学校	埼玉県立熊谷高等学校
埼玉県立不動岡高等学校	千葉県立柏高等学校
早稲田大学高等学院	神奈川県立西湘高等学校
石川県立小松高等学校	福井県立若狭高等学校
静岡県立磐田南高等学校	愛知県立刈谷高等学校
愛知県立明和高等学校	名城大学附属高等学校
大阪府立岸和田高等学校	大阪市立東高等学校
神戸市立六甲アイランド高等学校	奈良県立青翔高等学校
和歌山県立向陽高等学校・中学校	金光学園高等学校
香川県立観音寺第一高等学校	福岡県立香住丘高等学校
福岡県立嘉穂高等学校	福岡県立八幡高等学校
熊本県立熊本北高等学校	熊本県立第二高等学校
大分県立日田高等学校	

- ・「現段階では、当初の計画通り研究開発のねらいをあまり達成していない」（0校）

- ・「現段階では、当初の計画通り研究開発のねらいを達成しておらず、研究開発の内容が、事業目的に反し、又は沿わないと判断されるため、経費の大幅な減額又は指定の解除が適当である」

(0校)

○ 中間評価講評

1	岩手県立盛岡第三高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ すべての科目で、参加型の授業への改善が進んでいる。 ○ 評価について、明確な見通しを持つ必要がある。 ○ 事業の研究体制として、教育課程について、専門家による適切な指導を受けながら進めていく必要がある。 ○ 高大接続について、大学の授業への参加を可能にする段階的な教
---	--------------	--

		育プログラムを開発するなど、接続を進めていくことを期待する。
2	福島県立磐城高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域とのネットワークの構築が進んでいる。 ○ 研修会などにおける学習が生徒のどのような能力の向上につながっているのかを検証する必要がある。 ○ 評価がアンケート調査に偏っているため、客観的評価を導入するなど、研究仮説の検証方法について検討する必要がある。 ○ キャリア教育の系統化や充実、各種コンテストへの参加について、更に積極的に推進することを期待する。
3	茨城県立水戸第二高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題研究において、テーマ決定に十分に時間をかけており、生徒の主体性を引き出す取組を行っている。 ○ 教育課程において、SSH事業の目的の反映が不十分であるので、1年次からの取組充実や科目の内容・単位数の改善等について検討する必要がある。 ○ SSHの取組と成果が学校全体に波及するような取組を行う必要がある。 ○ 数学に関する活動をより推進することを期待する。
4	茗溪学園中学校高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事業の実施状況をよく検討評価し、改善しながら実施することが適切に行われている。 ○ 研修会の参加だけでなく、課題研究や理科の実験実習など生徒の主体的な体験を更に充実させ、生徒の内から湧き上がる活動を増やしていく必要がある。 ○ 地域連携や国際交流の取組について、更に充実させる必要がある。 ○ APについての取組など、今後の高大接続について期待する。
5	作新学院高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 様々な事業に積極的によく取り組んでおり、好奇心、興味・関心、協調性、探究心などが向上している。 ○ SSH事業として開設されている科目以外の授業の改善やキャリア教育の充実が必要である。 ○ アンケート調査結果に対する分析が不十分であるため、考察も含めて改善する必要がある。 ○ 国際性の育成において、課題についての対策を講じているが、更に改善していくことを期待する。
6	埼玉県立川越高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ ティームティーチングやゼミ形式の授業、生徒の興味に合わせたフレキシブルな授業構成、校外での実習など、授業改善が十分に進んでいる。 ○ SSH基礎Ⅰ、Ⅱにおいて、成果が認められる。 ○ 評価・検証に関して、アンケートによる意識調査のみを行っているが、より客観性の高い方法を導入する必要がある。 ○ 数学に関する取組が少ないので、その増加と成果に期待する。
7	埼玉県立川越女子高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教科間連携を中心に取組が着実に進められ、それが多くの教員の意識改革や生徒の興味・関心の高揚につながっている。 ○ 国際性の育成において、継続性や効果の面からもメール交流以外の方法も模索する必要がある。

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 評価について、より細かい項目の設定や多面的な方法の導入を進め、取組の成果をより分析的に行う必要がある。 ○ 教科間連携や学年連携で、数学、物理、情報をどのように組み込むと科学的リテラシーと論理的思考の向上に有効に機能するかという観点の研究に期待する。
8	埼玉県立熊谷高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 探究的学習活動である「熊高ゼミ」に全生徒が取り組んでおり、また、科学技術系のコンテストへの参加人数が増えている。 ○ 評価検証のためにTIMSSを利用しているが、内容項目の選択や高校生に適した尺度の導入を検討する必要がある。 ○ 特別な教育課程を編成していない中での活動であるため、具体的な目標設定、成果と課題をどのように共有し改善を図るかについて、一層明確にする必要がある。 ○ 論理的思考力の育成に関する取組において、思考力が高まった要因を詳細に分析することを期待する。
9	埼玉県立不動岡高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 評価について、ルーブリックの作成や生徒の評価スキルの向上方策が工夫されている。 ○ カリキュラム開発の視点をより明確にし、授業や様々な取組がどのように課題研究につながるかを分析する必要がある。 ○ 「持続可能な社会の創造・発展に貢献できる人材育成」に関する研究や実践において、質・量の両面の充実が必要である。 ○ ユニット授業に探究的・問題解決的な内容を付加・充実させる必要がある。
10	千葉県立柏高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ SSHの活動が着実に展開されており、評価・検証も科学的に行われている。 ○ 「課題研究」では、課題発見能力を育成する視点を持つ必要がある。 ○ 各取組の中で具体的に目指しているものと全体として目標としているものについて、整合性が見られない面があり、改善する必要がある。 ○ 研修会のレポートや取組の成果について、Web上に公開するなど、HPの充実や情報発信を期待する。
11	東京都立小石川中等教育学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「科学的思考力・自己学習力・コミュニケーション能力を高め、国際社会に活躍するリーダーを育てる教育の開発」は、全生徒を対象として推進され、成果を上げている。 ○ 高大連携にとどまらず、高大接続の改善に資する研究を行う必要がある。 ○ 理系の学習意欲の変化、科学的思考力、自己学習力、コミュニケーション力が育っているのかどうかを数値データなどを用いながら評価する必要がある。 ○ 図書館の活用、カフェテリアといったスペースの活用によるコミュニケーション能力の育成など、有効と考えられる取組について、その効果を分析することを期待する。
12	早稲田大学高等学院	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大学附属高等学校の利点を活かして、大学と連携して先進的な理

		<p>数教育に取り組んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ SSH事業を個々の教員の取組ではなく、学校全体のチームとしての取組にする必要がある。 ○ 卒業論文において、SSH事業を活用して早くから独自のテーマを見つける指導を充実させる必要がある。 ○ 今後の中高一貫教育での生徒の育成という観点から、個の能力を伸ばす方策として、個の成長にも着目した指導にも取り組むことを期待する。
13	神奈川県立西湘高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「SSH防災」など特色ある科目が設定され、ユニークな切り口からSSH事業を展開している。 ○ 授業ビデオライブラリーを用いた授業改善について、有効な活用法を研究していく必要がある。 ○ 大学院生がTAとして課題研究に参加するなどの連携がなされているので、今後は高大の接続の改善に資する研究を進めていく必要がある。 ○ 国際交流に積極的に取り組んでいるが、単なる文化交流にとどまらず、科学交流に発展させることを期待する。
14	石川県立金沢泉丘高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ SSH事業の趣旨や目的を十分に踏まえた事業展開が進められ、生徒に期待される変容も見られるなど、高い効果を上げている。 ○ 「コスモサイエンス」や「AIプロジェクト」の設置など工夫された教育課程の編成となっている。 ○ 課題研究のテーマ設定には、生徒の自主性・自発性を生かすように工夫していく必要がある。 ○ 部活動だけでなく、普通科理系へのSSH事業の取組の拡大を期待する。
15	石川県立小松高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 演習型から探究型への授業の転換など、多くの教員の意識が向上している。 ○ 課題研究の課題設定にあたっては、生徒の自主性を生かす観点を全体として持つ必要がある。 ○ 国際性の育成については、語学力の向上や国際科学交流について、学校全体としての取組に改善していく必要がある。 ○ SSHの事業の研究課題の目的が総花的で、学校の状況と課題を十分に反映していない部分があるので、焦点を絞り、優先的に取り組むことを明確にして、更に成果を上げることを期待する。
16	福井県立若狭高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高校生環境エネルギー学会を設立するなど、積極的な取組が見られる。 ○ 海洋関係で高大連携が進められているが、大学との共通教育プログラムの開発など、接続に向けた取組を行う必要がある。 ○ 評価方法に関する成果があまり読み取れないため、専門家からアドバイスを受けるなど、適切な評価方法を検討する必要がある。 ○ 福井県南部の拠点校としての特色を持っていることから、県内ネットワークの充実に向けての努力を期待する。

17	長野県屋代高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「一人一研究」の取組などを通して、教員の共通意識や生徒の主体性を育むものとなっており、成果が出てきている。 ○ 国際性の育成について改善してきており、更に発展させようとするなど、積極的に取り組んでいる。 ○ 附属中学校の併設で、理数科の中高一貫教育も可能となるので、連携した教育課程の構築を行う必要がある。 ○ 科学系の部に所属する生徒や化学・生物オリンピックの参加生徒が増加する取組を期待する。
18	静岡県立磐田南高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 普通科への拡大により、全教科によるSSHの取組が実施され、学校として成果の共有・継承に取り組むなど、良い方向で事業を展開している。 ○ 科学的な語学力の育成については十分取り組んでいるが、国際感覚を育てる取組も行う必要がある。 ○ 大学との交流・連携はなされているが、高大接続については不十分であり、接続に資する改善が必要である。 ○ 「サイエンス探究」を普通科に設定し、英語の学習意欲の向上が見られるが、更に理科への関心を高める工夫を期待する。
19	名古屋大学教育学部 附属中・高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 協同的学習の特質についての分析が非常に適切に進んでいる。 ○ 研究成果を評価する際、大学の附属校であることと中高一貫校であることがそれぞれどのように関係しているかを明らかにしておく必要がある。 ○ 学習方法の研究が充実することは大変良い方向であるが、それに偏りすぎることのないように注意する必要がある。 ○ 高大接続において、学び方のギャップを埋めるための取組に成果が見られるが、更に進めて、単位互換などの方策も研究することを期待する。
20	愛知県立刈谷高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 理数系部活動がSSH指定を機に活発化しており、コンテストへの参加も積極的に取り組んでいる。 ○ 課題研究というSSH指定校に期待されている課題設定能力・創造力等をもつ人材育成のための重要な取組を学校として明確に位置付けることが必要である。 ○ 「豊かで持続可能な社会」をキーワードに特徴ある課題設定で事業に取り組んでいるが、その課題の達成に関する評価を十分に行う必要がある。 ○ 教員の指導力向上の取組について、どのような効果を目指し、どのような指導力の向上を目的としているのか、明確にして行う必要がある。
21	愛知県立明和高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大学や研究所、地域との連携が多数企画され実施されている。 ○ 目標達成のために設定された5つの仮説において、記載されている手段や方法で実施できたとしても、目標とするレベルに達するものかどうか、再検討する必要がある。 ○ 課題研究をしっかりと取り組むことのできる環境を、教育課程を軸として作る必要がある。

		<ul style="list-style-type: none"> ○ ハイレベルな授業をするために教員間に連携や意識の高揚が見られたプロセスや課題について解明することを期待する。
22	名城大学附属高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「学び力」や「主体的な学習」をベーススキルの中に明確に捉えている点で研究開発的意義が大きく、また「サロンの学習」など他校に見られない特徴もあり、成果を上げている。 ○ 生徒の変容について、目的や仮説に照らし合わせた検証が十分ではないので、事実に基づいて丁寧な分析する必要がある。 ○ 内発的動機付け、主体的自発的な学びに向けて更なる工夫や具体的な方法の提示、成果の検証を行う必要がある。 ○ 一般的な指導力向上には取り組んでいるが、学校の課題や事業の研究仮説に合わせた指導力向上の取組に期待する。
23	滋賀県立膳所高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の変容の把握、評価検証も十分行われ、事業遂行が高いレベルで進められている。 ○ 課題設定の決定プロセスに、生徒の自主性や探究心を最大限引き出したり、好奇心を目覚めさせる工夫が施されている。 ○ 大学との連携に積極的に取り組み、大学と多くの有用な情報交換が行われているが、高大間のカリキュラムの接続などの大学接続の取組にまで深めていくことを期待する。 ○ 自校での生徒育成をより高いレベルとすることを旨とするとともに、他校への普及にも更に積極的に取り組むことを期待する。
24	大阪府立岸和田高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域と連携した様々な取組を積極的に行っている。 ○ アーカイブやセレンディピティに関する教育について、目的や継続的な取組の仕方を明確化し成果のフォローアップを行うことが必要である。 ○ 国際性を高める取組については、科学的な内容に関連するように留意する必要がある。 ○ 出張講義の受講や情報交換などの高大連携を行っているが、高大接続の取組への拡充を期待する。
25	大阪市立東高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「水」をテーマに総合性をもつ特色ある教材開発を進めていて、自校の活動に留まらず、フォーラムを開催して他校との研究交流を実施している。 ○ 理数系部活動の部員数が増加しているので、今後は、コンテストへの参加を増やしていく取組を行っていく必要がある。 ○ 「研究室体験」など大学での研究に触れる機会の提供にとどまっているので、高大接続についても、具体的に進めていく必要がある。 ○ iPadの活用はSSH事業のみならず、教科・科目における授業改善など、幅広い効果的な利用を期待する。
26	神戸市立六甲アイランド高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒に身に付けさせたい能力・態度（12の力）を定義し、各事業との関連性を見極めながら計画的・相互関連的にそれらの力の育成を進めている。 ○ SSHに関連しない科目においても授業改善が行われる必要がある。 ○ 自主性の象徴である科学系部活動の部員がほとんど増えていない

		<p>ことを真摯に捉える必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 取組の評価をより統計的・客観的なものへと改善していくこと、PDCA評価をより適確なものへと深化させていくことを期待する。
27	奈良県立青翔高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題発見力を重視し、体験重視型の探究プログラムを実施しており、生徒変容の面で高い成果を上げている。 ○ 中高一貫校になることによるSSH事業への効果などの変化の分析をしっかりと行う必要がある。 ○ 理数科単独校である特色を生かすなら、全員がSSH事業に取り組む方向性を持つ必要がある。 ○ 評価点検の中で更に事業の充実を図るとともに、本事業の問題設定・実施内容・成果をまとめ、全県普及、全国普及に努めることを期待する。
28	和歌山県立向陽高等学校・中学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自然科学の内容を英文テキストを活用して理解させるなど、積極的な取組を行っている。 ○ 環境をテーマに設定していることから、地学の学習についても充実させる必要がある。 ○ 授業研究、チームティーチングを推進し、教員間の協働・連携を図る必要がある。 ○ 中学校から高等学校にかけて6年間フォローできるSSH事業のメリットを検証することを期待する。
29	金光学園高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ SSH事業をよく研究しており、取り組む方向性やバランスがよく、短期間で成果を出している。 ○ キャリア教育について、体験学習が中心であるため、例えば、事前事後の指導を充実させるなど、キャリアの形成をより促す取組が必要である。 ○ 留学生との交流や海外での英語活用などを行っているが、国際性の育成のために国際感覚を身につける取組を更に検討する必要がある。 ○ ゼミの取組を冊子としてまとめ、他校でも参考になるようにすることを期待する。
30	ノートルダム清心学園 清心女子高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 研究の計画性や成果の分析が際だっており、堅実に取り組んでいる。 ○ 科学英語研究会や理科教材研究会を開催し、他校との情報交換、自校の成果の普及など、積極的に取り組んでいる。 ○ ESDに関しては、視点の明確化、環境教育との差異、科学教育との関連性などを追究していく必要がある。 ○ 英語ディベート学習が成果を上げているが、これまでの取組と比べて工夫した点とその効果を明確にすることを期待する。
31	香川県立観音寺第一高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 理数系の部が活発に活動しており、科学技術系のコンテストにも積極的に参加している。 ○ SSHの事業を理数科だけの取組とせず、学校全体に広げていくことを検討していく必要がある。

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 海外研修が中核的に位置づけられているので、生徒が能動的に取り組めるプログラムの開発が必要である。 ○ より高い成果に向けた事業の充実のため、検証可能な目標や仮説を立てて年度毎の達成度を評価するなど、PDCAを踏まえて確実に取組の改善を図ることを期待する。
32	福岡県立香住丘高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3年生対象の科目の開設など、3年間を通した探究型のプログラムが展開されている。 ○ 「科学的能力の活用意欲」が通常の理系では低下傾向であることから、普通の授業の改善も併せて行う必要がある。 ○ 科学的探究能力の中に、問題の設定、仮説の設定などが含まれていないので、能力の捉え方を再考する必要がある。 ○ 表面的な評価がやや見られるので、生徒の論理的な思考力の深まりなどについて更に検証することを期待する。
33	福岡県立嘉穂高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校設定科目「アースサイエンスⅠ、Ⅱ」「総合科学リテラシー」は、注目すべき取組である。 ○ 研修会などにおける学習も大切であるが、通常の授業の中でどのような力が育成されたかが重要であることを認識し、科目の開設などを検討する必要がある。 ○ SSHとしての取組結果に対する仮説のとらえ方、それに適した評価方法について、専門家のアドバイスを受けるなど、再考する必要がある。 ○ 高大連携の取組は見られるので、高大接続まで高めていく取組を期待する。
34	福岡県立八幡高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校の研究体制において、業務を分担することで多くの教員が関わり、更に、互いに交流し研鑽を積む機会が増えている。 ○ 評価方法において、生徒の自己評価のみではなく、教師による評価等も取り入れる必要がある。 ○ 課題研究のスタイルを確立するとともに指導方法について更に工夫する必要がある。 ○ 国際交流も、海外で研修した生徒だけではなく、更に一般の生徒にも広げる工夫を期待する。
35	佐賀県立致遠館高等学校・佐賀県立致遠館中学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中高一貫教育の特色を生かして、SSH事業に沿って体系化された教育プログラムを総合的に実施している。 ○ 「SSHⅠ」等で扱っている高度な内容に対して、生徒の理解が十分でない面があるので、内容の点検、教材の工夫などについて改善を行う必要がある。 ○ 国際化に関して、英語での発表や議論する力の育成がやや遅れており、改善する取組が必要である。 ○ 課題分析を適切に行っており、今後の更なる改善により、成果の全国への普及を期待する。
36	熊本県立熊本北高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ アクティブラーニングの手法を取り入れ、生徒の主体性を引き出す取組をしている。 ○ 理数系部活動の部員の増加と内容の充実を図る必要がある。

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 問題発見能力などの8つの力について、より分析的な評価及びその結果に基づく授業改善を行う必要がある。 ○ 大学から課題研究の指導を受けながら、将来の接続に向けて計画をしており、その取組内容や成果に期待する。
37	熊本県立第二高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ SSワーキンググループを設けることで業務を分担し、全校体制をきちんと構築している。 ○ SSH I～Ⅲの各内容相互の関連をより明確にし、それらの設置による生徒の変容を測る評価を行う必要がある。 ○ 論理的思考力の低下など、低下した項目についての分析を十分に行う必要がある。 ○ 創造力・独創力・探究心に関する目標・評価規準の構造化や、各学習活動における具体的な目標の設定などについて研究すること期待する。
38	大分県立日田高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域での教員研修会や各教員の「授業改善提案」の作成など、教員の指導力向上のための取組を実施している。 ○ 地域・高大連携について積極的に取り組んでいるが、さらに発展させて高大接続や卒業生による研究指導、キャリア教育を実施する必要がある。 ○ 「科学探究基礎」の内容について、生徒が興味・関心を増し、SSクラス希望者が増加するように検討・改善を図る必要がある。 ○ 地域での活躍から全国レベルでの活躍に目を向けさせるために全国レベルのコンテストや国際コンテストにも積極的に参加することを期待する。